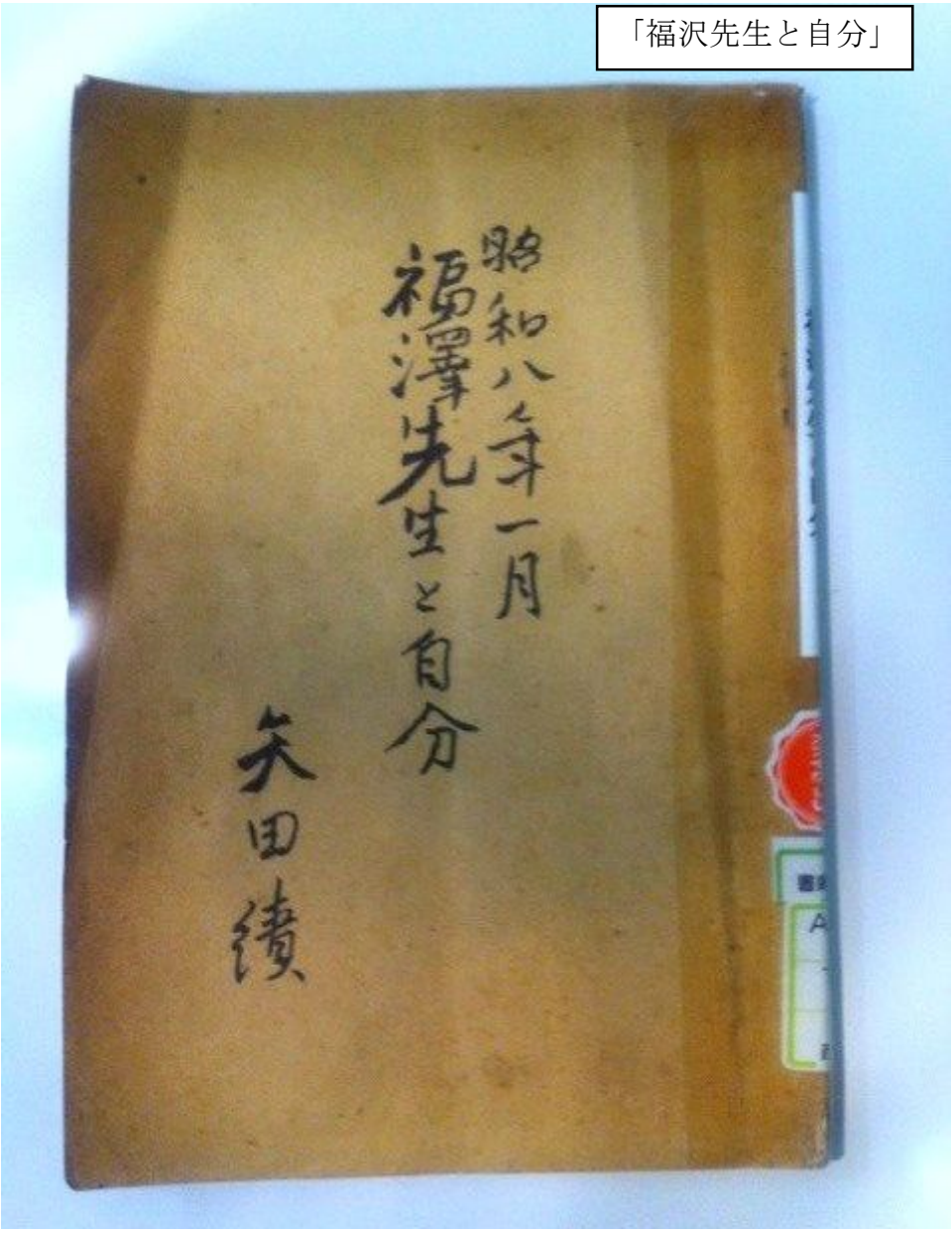
Ⅰ　矢田績その人

①福沢諭吉と矢田績

矢田は、万延元年、紀州和歌山の医者の家系谷井家の次男として生まれる。四男五女の子沢山のため家は貧しく、18 歳で紀伊新宮藩の藩老矢田家の養子となった。そして 21 歳のときに上京し慶応義塾に進んで福沢諭吉の門下生となった。**「福沢先生と自分」**は、昭和８年１月の公衆図書館内読話会新年初会での講演を筆記印刷したもの。記憶のままに諭吉の素顔や諭吉とのかかわり、エピソードなどが語られている。また慶応義塾当時の矢田は、将来役立つのは「文章と弁舌」と考えてもっぱらその鍛錬に励み、学業においても犬養毅（後の首相。5.15 事件で「話せばわかる」の名言残し銃弾に倒れる。）と首席を争ったことなど慶応義塾時代の様子も語られる。

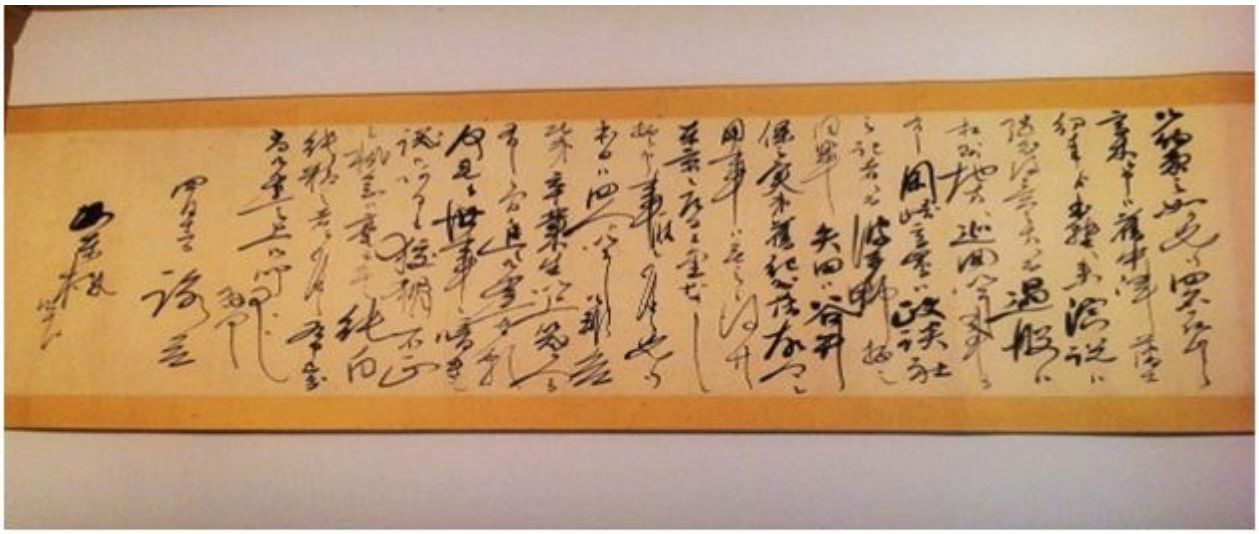


「福沢先生と自分」

Ⅰ　矢田績その人

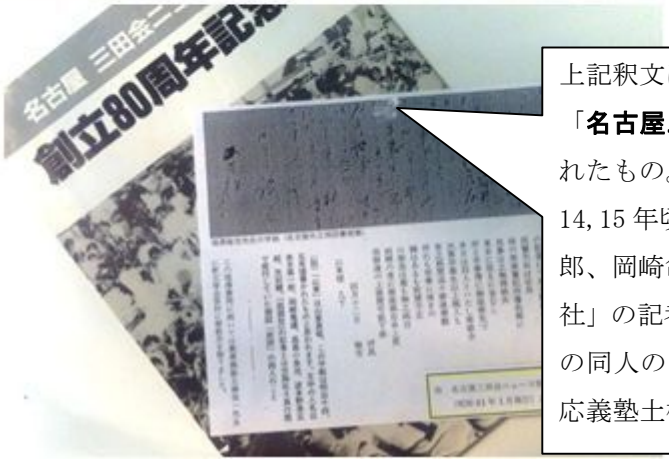
②福沢諭吉　直筆の手紙

諭吉が、矢田ら門下生を派遣するにあたって紹介するために知人に宛てた直筆の手紙。甥の谷井一作氏からの寄贈されたものだが、なぜその手元に残ったかは不明。諭吉は、地方などからの依頼でその門下生を度々派遣していた。矢田も耶蘇教と東本願寺の紛争で愛知岡崎に、また当時大きな社会問題となった北海道開拓使払下問題で函館に、それぞれ演説を行うために派遣された。卒業後、神戸又新日報の創設にあたり主筆として赴くが、それも諭吉の勧めによる。



福沢諭吉先生の直筆の手紙（西図書館所蔵）

御約束の如く先づ四名罷出候
高木と申すは舊中津藩士
幼年より本塾へ参演説は
随分得意の方にて過般は
相州地方へ巡回いたし候事も
有之岡崎高島は政談社
の記者にて波多野抔の
同輩矢田は谷井
保の実弟舊紀州藩故郷に
用事は之無得候共
東京に居るに金なし
抔と申事情に御座候先づ
本日は四人といたし御都合
次第卒業生以上幾人も
有之候間追々御逢奉願
何れも世事に暗きの
譏はあるも狡猾不正
の掛念は毫も無之純白
純情の者に御座候右申上度
尚御逢の上御聞可被下候
拝具
四月十二日　諭吉
山東様　几上



上記釈文は左の
「**名古屋三田会ニュース別冊創立 80 周年記念号**」に掲載されたもの。［註］には、「山東」は山東真砥、この手紙は明治 14, 15 年頃書かれたものと思われます。文中人名は高木喜一郎、岡崎亀雄、高島小金治、波多野承五郎、矢田績。「政談社」の記者とは交詢社社員の間で発行していた雑誌「政談」の同人のこと。なお、この手紙の釈文等全面については慶応義塾土橋俊一先生に協力を賜った、とある。

Ⅰ　矢田績その人

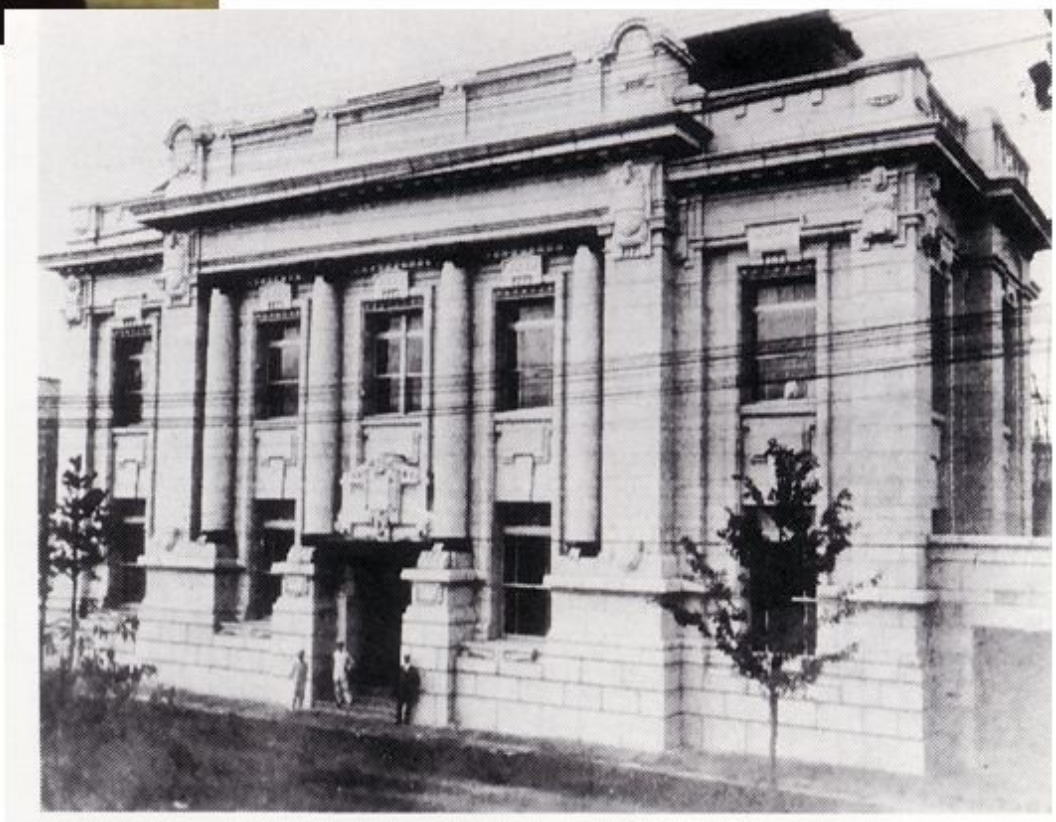
③名古屋財界の重鎮“今彦左（大久保彦左衛門）”

矢田の名古屋とのかかわりは明治 38 年に三井銀行の名古屋支店長として赴任したときから始まる。伝馬町にあった支店を先見の明をもってまだそれほどでもなかった広小路へ他行に先駆けて移転。豊田佐吉ら有望な人材への支援を惜しまず、福沢桃介（後に「電力王」と呼ばれる）の「名古屋電燈」入りを導くなど、この地方の産業、経済の発展に大きな功績を残した。大正４年に監査役となって一度東京に戻るが、大正 11 年に名古屋へ「帰還」。東区橦木町に住居を構えて永住の地と定めた。実業界の一線を退いてはいたが、居宅の応接間は“ご意見番”を慕って千客万来、人はそれを「**橦木町倶楽部**」と呼んだ。その様子や功績は、手記や逝去を報じる新聞記事などに詳しい。

支店長時代の矢田績と三井銀行名古屋支店

矢田が三井銀行名古屋支店長時代に難色を示す本店を説得して移転を進めた**三井銀行名古屋支店（石造２階建）**。場所は広小路にある現在の三井住友銀行名古屋支店と同じ地。竣工は 1913 年（大正 12 年）なので完成をみることなく矢田は支店を去った。設計は名古屋公衆図書館を設計した同じ鈴木禎次で、名古屋で最初に手がけた本格的な銀行建築としても有名。

※　建物写真は、「20 世紀の建築文化遺産展」建築展図録　鈴木禎次生誕 130 年記念展「鈴木禎次と同時代の建築家たち／20 世紀の名古屋の建築」から転載。



Ⅰ　矢田績その人　　**④読話会と関連著作物（西図書館所蔵のもの）**

文章と弁舌を得意とする矢田であったが、後年、名古屋で各界からの文化推進の社交機関として読話会（初めは放談会）を主宰。公衆図書館長が幹事役。月に２回、晩餐を共にして雑談したり、ときに講師を招いて話を聞いたりした。有志 60 余名で組織されたが、新規入会は会員の満場一致でなければ容易に許されない見識を持っていた。また矢田は新聞へ連載するほど多くの手記を残し、この地方の産業発展の草創期を知る上でも貴重な資料となっている。

矢田績　関連著作物（西図書館所蔵）

書　　名	発行年月	概　　要
懐舊慢話 続懐舊慢話	大正 11 年９月	大正 11 年春、名古屋へ帰還した翁が、その夏、半生をふりかえり、新聞連載のため執筆した手記。出生からの来歴や、福沢諭吉を始め著名、無名の多くの人たちとの出会いや翁の事跡にかかるエピソード、当時の想いなどを記憶のままに書き綴っている。慶応義塾当時に後藤象二郎や陸奥宗光を訪問したときの様子も書かれている。
穿き違への日本 附たり名古屋小言	大正 12 年７月	自らを新柳道人と号して、54 編にわたり政治、外交から宗教、教育、冠婚葬祭など日本の「穿き違えた」世相を皮肉の利いた軽妙な筆致で斬っている。また付録として「名古屋小言」と題し、愛する名古屋にあえて経済人らしい視点で都市建設、都市経営などに苦言を呈してる。前年新聞に掲載したものを収録。
熱中冷語	昭和２年 10 月	手当たり次第に題目を捉えて、極めて平易通俗に書き並べたものの…自分の文章は達意を主とし、従って冗漫に渉るの嫌いはあるが、如何なる種類の人にも読みやすく分かり易くせんには、斯くなるのも止むを得ない…論ずる所極めて浅薄卑近、見るに足らぬは勿論であるが、高遠なる理論必ずしも真理にあらず… （「はしがき」より）　矢田節絶好調♪
熱海みやげ	昭和５年４月	病後の静養のため、50 余日ほど翁は熱海に滞在していた。その間に自ら詠んだ詩歌句や翁に贈られた祝歌句などを取りまとめたもの。また巻末には、熱海発展を願い、市政やまちの振興策など滞在中に気づいたことを辛口な熱海改良論として掲載している。
福澤先生と自分	昭和８年２月	昭和８年１月の公衆図書館内読話会新年初会での講演を筆記印刷したもの。記憶のままに諭吉の素顔や諭吉とのかかわり、エピソードなどが語られている。また当時の矢田は、将来役立つのは「文章と弁舌」と考えもっぱらその鍛錬に励み、学業においても犬養毅（のちの首相。5.15 事件で「話せばわかる」の名言残し銃弾に倒れる。）と首席を争ったことなど慶応義塾時代の様子も。
私の保健法	昭和 11 年２月	新愛知新聞に連載。食事、酒量、睡眠、運動、生活習慣など翁の健康保持についての心構えや生活のあり様が記されている。「気まめ主義」（不精の反対）が健康の基としてそれを実践。愛知医大勝沼精蔵博士の添え文付き。
懐旧瑣談	昭和 12 年６月	逝去の３年前、77 歳となって出生からの来歴を自ら綴ったもの。エピソードの多くは前出の「懐舊慢話」などと重なるが、公衆図書館設立後、市長や当局の対応への皮肉も。昭和 12 年、名古屋毎日新聞に約 40 日にわたり連載。
読話会　持寄文集 （第 100 回例会記念）	昭和 11 年 10 月	昭和６年２月に設立され、月２回の例会を重ねた読話会が、100 回を記念して会員が執筆し持寄ったものを編纂。会員は財界、官界、法曹界など各界にわたる。
矢田翁追憶百面相	昭和 16 年３月	矢田翁逝去から１年後、読話会が、会員らの翁の思い出などの寄稿を求め編纂したもの。155 人から寄せられている。

Ⅱ　名古屋公衆図書館　①多年の夢の実現～独立自由と社会的事業への貢献～

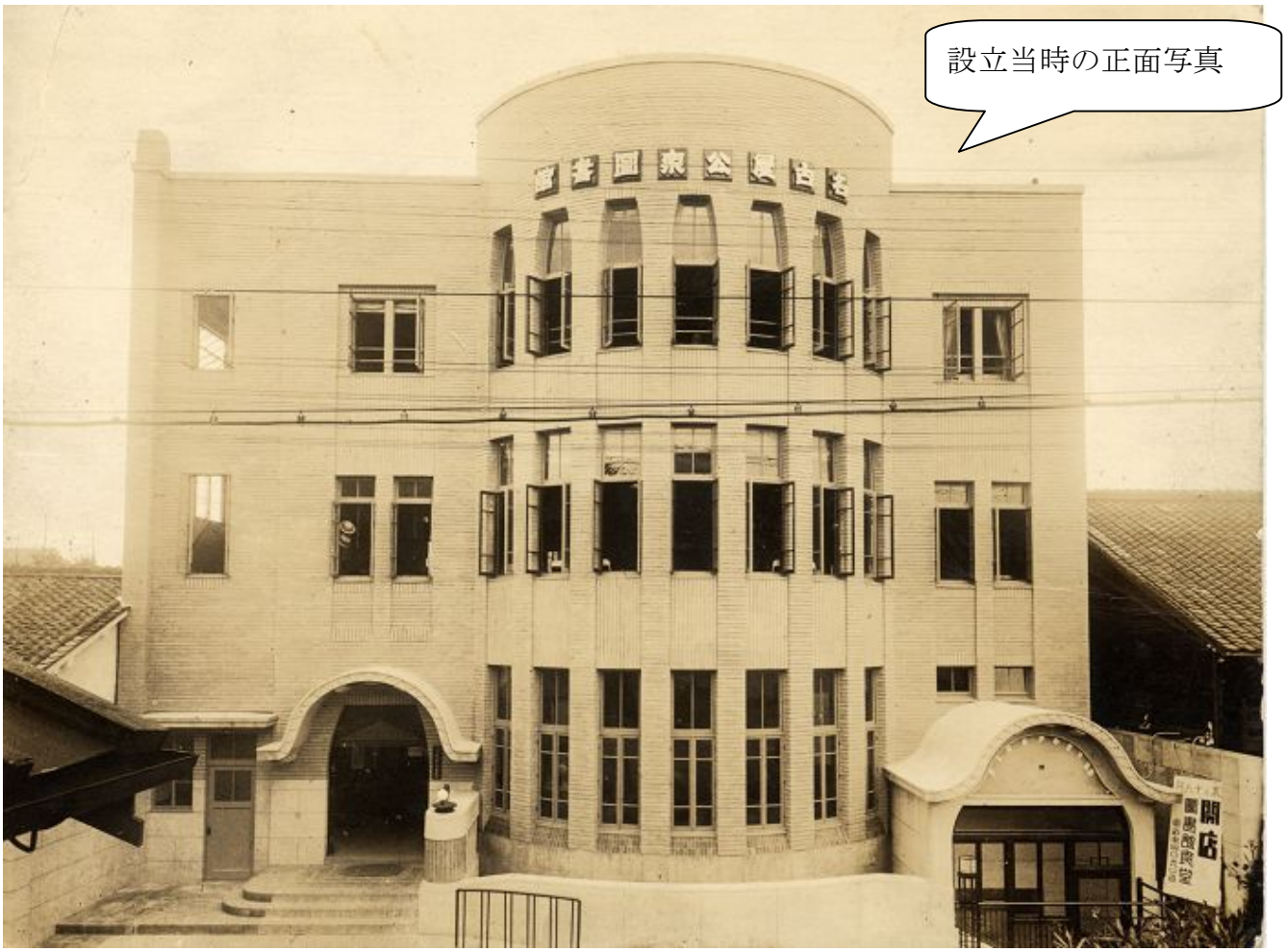
長年実業の世界に身をおき、多くの功績を残した矢田であったが、矢田の言葉でそれは「奉公人」としてであり「俸給生活者」であった。東京に呼び戻され監査役から三井系の東神倉庫の常務を務めていたが、多年の夢としていつか独立自由の身となり、実業以外の意義ある事業を行いたいと考えていた。それは必ずしも初めから名古屋で図書館を設立することではなかったが、名古屋公衆図書館「設立の趣意」にはそうした想いと名古屋への移住、図書館設立に至る経過がつぶさに書かれている。それと重なるが、より矢田の決意が滲むので「懐旧瑣談」の一文も原文のまま紹介する。

「大いに働き大いに活動した後はいつ此勤務生活を一擲して獨立自由の身となり實業方面以外に何か意義ある事業を經營したいとの素志であったソコで三井の奉公も已に廿六七年にもなり相當当三井の為にも働いたので歐洲大戦爭の終結を機會にここらで切り上げたいと豫ねて其心算で平素勤倹節約を守り極力貯蓄に邁進し相当自信も出来たので大正十年暮れ断然三井に對して退任を申出でたのである」（「懐旧瑣談」より）

②名古屋公衆図書館の設立

各新聞は矢田の美徳と図書館の前途を多いに祝福しいっせいに報じた。名古屋新聞は「『民衆図書館』から」と題して、矢田翁起草の設立趣意書を「近来の名文として推重に足るべきものがある」と讃え、大阪毎日新聞も「名古屋の誇り」と題し「矢田氏苦心の公衆図書館はやがて金のしゃちほことと共に名古屋市民が持つ一つの大きな誇りになるであろう」と結んだ。

また初代館長田所氏は取材に対し「この図書館の特色は、実業図書館として大名古屋の商工都市に生活する都会人の泉として最も活用されることを望む」と語っている。



Ⅱ　名古屋公衆図書館

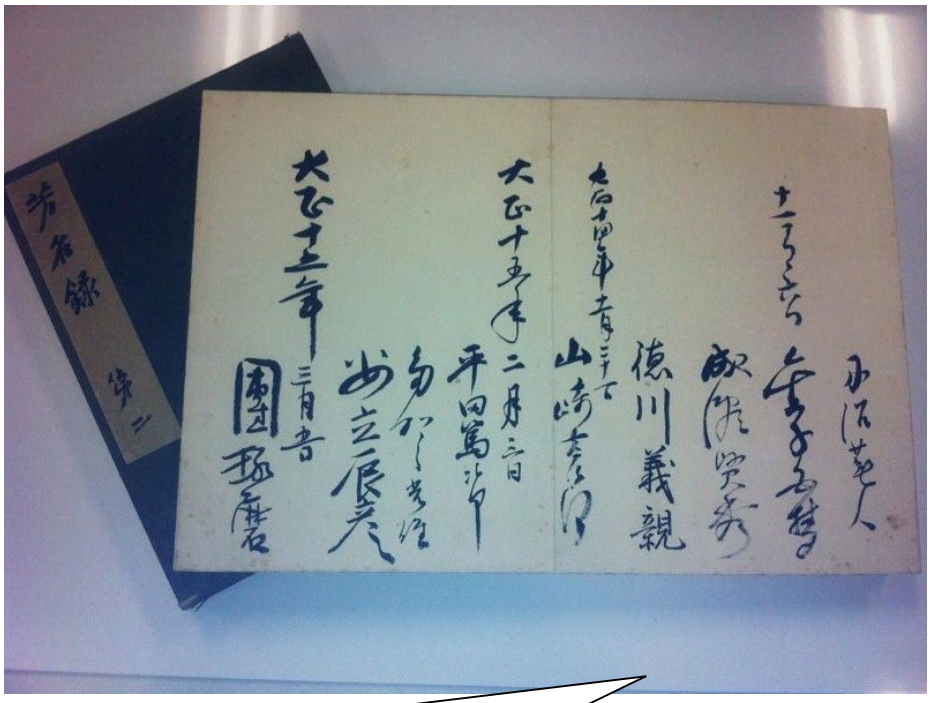
③図書館案内

建物は、鈴木禎次氏（「三井銀行名古屋支店」参照）設計。
地下１階地上３階の鉄筋コンクリート造、延床 933.9 ㎡。工事費 85,000 円。

地階―食堂（コーヒー５銭、定食 15 銭）
１階―新聞室・普通閲覧室・出納所
２階―特別閲覧室・談話室
３階―講習室（昭和３年から児童閲覧室）

設立時の蔵書は 14500 冊で、当初は館内閲覧に力注ぎ経営。
玄関横の新聞室を除き、館内は入館料が必要。
普通閲覧券１回券３銭　　10 回券 20 銭　　30 回券 50 銭　　特別閲覧券６銭

当初１年間の有料入場者数　72994 名　（開館日数 349 日。日平均 209 人）
（新聞雑誌無料閲覧者は正確には知り難いが一日 300 人を下らずの記述）



来館者が記帳した**芳名録**
徳川義親（尾張徳川家第 19 代当主、徳川美術館・蓬左文庫創設）、平田篤次郎（東芝電機創始者）、団琢磨（日経連理事長、血盟団事件で暗殺）、松井茂（愛知県知事）、池田茂彬（大蔵大臣）、河合谷禰八（昭和天皇侍従次長）、宇垣一成（陸軍大臣、外務大臣）、柳宗悦（思想家、芸術家、「民藝運動」の創始者）、香取秀真（工芸家、歌人）、萩原井泉水（俳人、自由律俳諧提唱）らの名が見られる。
※（　）は参考。記帳時のものとは限らない。

Ⅱ　名古屋公衆図書館

④名古屋市への図書館寄贈と翁の逝去

設立 15 年目を迎えた昭和 14 年、１月には館外携出制度、同５月からは家庭訪問文庫を開設するなどサービス拡充に努め、設立以来の利用者は 100 万人に達していたが、高齢と健康の衰えもあり「人間の生命には限りがあり事業は恒久である」として名古屋市長に図書館の寄贈を申し出た。当時名古屋市には大正 12 年に開館した市立名古屋図書館（現在の鶴舞中央図書館）が１館あるのみで、市長は「満腔の感謝を表して歓迎」し、名古屋市会も満場一致で受納を決定。昭和 14 年９月、市立名古屋公衆図書館となった。そして翌３月５日、翁はすべての始末を終え、荷を降ろすように永眠の途についた。

昭和 14 年９月４日、受渡式において懸市長に目録を贈呈する矢田翁（市長貴賓室）

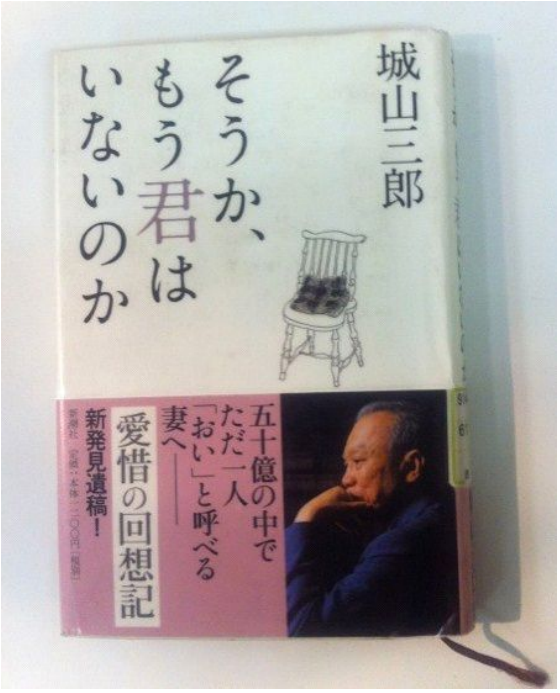
名古屋公衆図書館の寄贈、矢田翁の逝去を報じる新聞記事の切抜きが集められたスクラップブック。昭和 14 年、15 年当時は準戦体制の時期でもあり、台紙には不用になった掛け軸などのカタログ本が用いられた。

下は大正 13・14 年、公衆図書館設立当時の新聞記事切抜き帳。

Ⅱ　名古屋公衆図書館

⑤城山三郎と市立名古屋公衆図書館（余談）

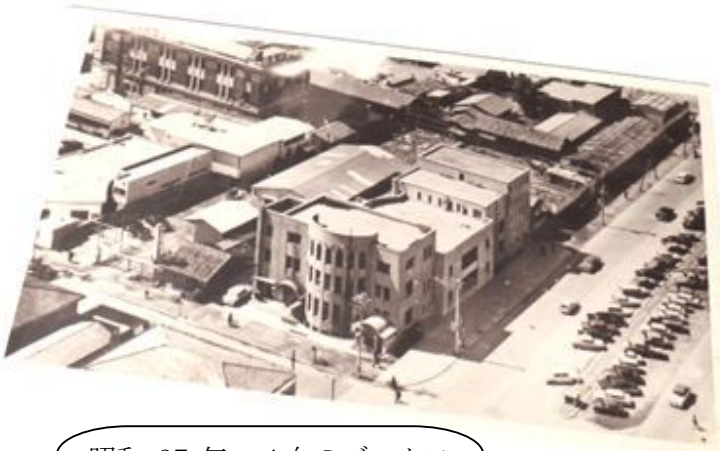
市立名古屋公衆図書館にまつわるエピソードをひとつ紹介。愛妻家で知られる著名な作家城山三郎が、夫人と出会った場所が、日頃通い詰めた「市立名古屋公衆図書館」というおはなし。たまたまの臨時休館の玄関先での遭遇。「くすんだ図書館には不似合いな華やかさで、間違って天から降りた妖精」だったとか。そのことは遺稿となったエッセイ『そうか、もう君はいないのか』の冒頭シーンで描かれている。また経済小説家らしく実業家矢田績翁に触れることも忘れてはいない。



Ⅱ　名古屋公衆図書館

⑥生まれ変わった名古屋公衆図書館（栄図書館）

昭和25年公布の図書館法により図書館サービスは大きな転換期を迎えた徴収していた閲覧料は撤廃され、閲覧中心から館外貸出へ、閉架書庫から開架書棚へ、市民の希望に応じて求められる資料を得やすい場所で提供することをモットーに、誰でも気軽に利用できる市民の公共図書館として発展することが求められた。昭和27年８月、名古屋公衆図書館は、栄え図書館と改称し生まれ変わった。そして昭和31年４月、栄図書館を拠点に巡回文庫（現在の自動車図書館）を発足させ、昭和37年には４台のブック・モビルが市内各地を駆け回った。



上空から

昭和 37 年、４台のブックモビルが栄図書館を拠点に市内各地に本を届けた。

おとなも子どもも
賑わうにぎわう
閲覧室風景

Ⅱ　名古屋公衆図書館

⑦建物の終焉と受け継がれる意思（西図書館の建設）

翁が「建築は新式鉄筋コンクリートで自分としてはいささか奮発した積り」と自慢したように、堅牢な建物は昭和20年３月の大空襲で大きな被害を受けながらも８万冊の蔵書は戦火による焼失を逃れ、戦後窮乏期の市民の大きな慰めとなった。また昭和31年には地下鉄東山線の敷設に伴い建物を南へ15m移動させる大工事も行われた。そして昭和33年、矢田翁と関係の深かった三井・豊田・電力・ガスなどの各社の篤志寄付を中心に翁の知友有志が参加して矢田績翁顕彰会が結成され、当時の栄図書館の玄関口に立派な大理石の台石に翁の胸像が建立された。市長はじめ多数の参列者のもと顕彰と除幕式がとり行われ、台石には当時の小林市長の書による「アナタはエライ　立派なシゴトをして下さった・・・・」と顕彰文が刻まれた。

そうした戦禍や長年の風雪を凌ぎ、設立以来大正風のしゃれた建物として市民に親しまれてきた図書館であったが、戦後復興から高度成長へと移り行く時代の中で遂に終焉を迎える。名古屋市の１区１図書館構想の具体化が進む中で、昭和36年にはすぐ北隣に近代的な愛知県図書館が建設されたこともあり、栄図書館の移転先が西区の現在地に決定、昭和40年11月装いも新しい西図書館が完成した。伝統ある創立の地から惜別の移転改称であり、名古屋公衆図書館（栄図書館）はそうして役割を終えた。翁の意思は、胸像とともに西図書館に移され、平成６年に現在建物に改築された今も２階庭園に佇みひっそりと図書館を見守っている。

なお名古屋公衆図書館・栄図書館の資料群については、現在西図書館には、郷土資料を中心に戦前からのものも含めて約2000冊の資料が、またそれ以外の資料約９万５千冊も鶴舞中央図書館の閉架書庫に保管されている。

矢田績翁顕彰会
胸像建立除幕式
（昭和33年６月26日）

祝詞を読む小林市長

碑文

今は２階庭園にいます。